

第38回 企画展

写真と文書で見る

徳島工業高等学校史



明治37(1904)年に開校し、平成21年3月高校再編により
徳島科学技術高校に生まれ変わった徳島工業高等学校の歴史を
写真や公文書で紹介していきます。

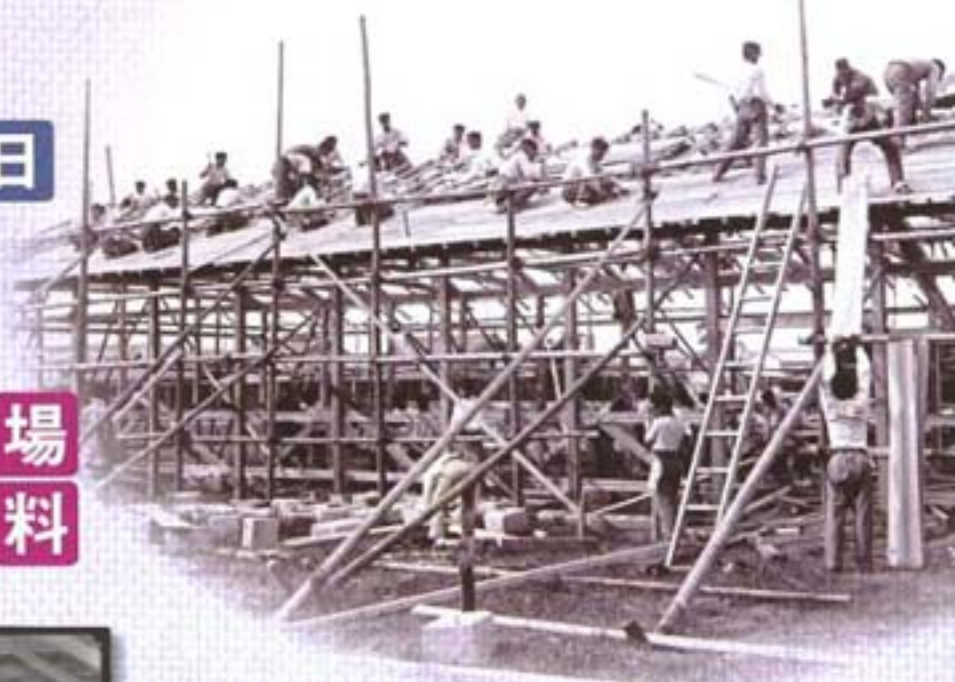
平成21年 10月27日(火) ~ 平成22年 1月24日(日)

徳島県立文書館 2階 展示室

開館時間 午前9時30分から午後5時まで

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合その翌日)、
毎月第3木曜日、年末年始(12月28日~1月4日)

入場
無料



文化の森総合公園 徳島県立文書館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山
TEL 088-668-3700 FAX 088-668-7199
URL <http://www.archiv.tokushima-ec.ed.jp/>

徳島工業高等学校略年譜

和 暦	西 暦	月 日	内 容
明治35年	1902	11月11日	文部省告示187号にて、徳島市大字前川村に「徳島県立工業学校」設置を認可。翌年本校舎落成（3,362㎡）、学校用地（23,270㎡）
明治37年	1904	2月25日	吉田佐次郎を初代校長に任命（元石川県立工業学校教諭）
		5月2日	初の始業式を挙行。床次県知事臨場。この日が開校記念日となる
明治38年	1905	3月29日	本校規則中学科課程を改正し、専科及び別科を加設する
		10月6日	名東郡加茂名村大字庄村に別科機織部第一回臨時教場、本校内に別科木工部夜間教場を開校
明治40年	1907	3月24日	第1回卒業証書授与式を挙行。谷口県知事臨場
明治41年	1908	4月15日	皇太子殿下（大正天皇）来校
明治42年	1909	3月25日	文部省告示93号にて、本校附設職工徒弟学校家具科を設置。4月より開校
		10月29日	寄宿舎「白雲舎」を新築（1,118㎡）
明治44年	1911	3月30日	県令39号により、従来の木工科を建築科と改称
大正4年	1915	11月3日	創立10周年記念式典を徳島公園千秋閣で挙行
大正11年	1922	4月11日	県令21号にて学則を改正。本科の修業年数を5ヶ年とする。旧附設職工徒弟学校家具科を継承して修業期間2年の専修科家具科を設置
		11月28日	皇太子殿下（昭和天皇）来校。記念植樹
大正12年	1923	5月17日	文部省告示368号により県立工業補修学校を併設。同年より開校。本科別科施設を継承
大正13年	1924	5月2日	創立20周年記念式典を徳島公園千秋閣で挙行
昭和4年	1929	4月	文部省告示202号により、専修科家具科を廃止し、修業年限3年の木材工芸科を新設
昭和9年	1934	11月1日	創立30周年記念式典を挙行。同窓生の寄付により御真影奉安殿、国旗掲揚台を建設
昭和11年	1936	11月2日	高学年が実包射撃訓練に参加
		12月	12月県議会にて昭和12年度より3ヶ年継続事業として移転改築が認可
昭和13年	1938	7月21日	県土木課の指導で本校生徒が校地埋め立て作業に従事する（5日間）
		12月27日	県告示637号にて傷痍軍人工業再教育所を併設
昭和14年	1939	3月13日	文部省告示120号により修業年限5ヶ年の機械科を設置
		10月18日	徳島市矢三町字宮東39番地の新校舎に移転する
昭和15年	1940	3月28日	文部省告示368号により修業年限2ヶ年の第二本科建築科を設置
		10月28日	移転改築工事完了
		11月18日	校舎移転改築落成式を挙行
昭和16年	1941	3月1日	御真影奉安殿落成
		3月29日	文部省告示407号により修業年限3ヶ年の木材工芸科を修業年数5ヶ年に延長する
		8月22日	県立工業学校学徒振興隊が結成される
昭和17年	1942	2月6日	文部省告示48号により色染部を応用化学科として設置。機織部は紡績科と改称
昭和18年	1943	1月21日	勅令36号により中学校実業学校令が改正、修業期間が4ヶ年となる
		3月2日	文部省令4号実業学校規定により、応用化学科を工業化学科に改称
昭和19年	1944	2月29日	県告示176号により紡績科の募集を停止。機械科を2学級とする
		4月1日	附設県立第二工業学校（夜間部機械科）を開校。修業年限は4ヶ年。講習科は自然消滅
		6月5日	農繁期学徒動員で180名が出動
昭和20年	1945	2月27日	紡績科の募集復活
		4月6日	建築科第二類を設置
		6月16日	県立中学校長会で学徒皆勤強化のため3年生以上の授業を全廃
昭和21年	1946	3月15日	第二本科建築科廃止
		5月15日	米軍軍政官学校を視察
昭和22年	1947	4月17日	進駐軍学校を視察
昭和23年	1948	1月	校歌制定
		4月1日	新制高等学校設置。徳島県徳島工業高等学校設置。県立第二工業高等学校を定時制夜間部として併設。全日制に土木課程を新設
		12月15日	初のPTA総会を開催
昭和24年	1949	3月31日	高等学校再編で、徳島市工業高等学校を統合、市工業高校の大和町校舎を通称東校とする
昭和25年	1950	4月1日	定時制夜間課程に建築課程を新設
昭和27年	1952	4月1日	定時制夜間課程に修業2ヶ年の別科（電気・建築）を設置
		8月20日	女子便所ができる
昭和29年	1954	11月20日	創立50周年記念式典を挙行。記念事業として、特別教室（工業会館）を建設
昭和30年	1955	3月31日	定時制別科を廃止
昭和31年	1956	4月1日	東校を分離し（県立徳島東工業高等学校）、徳島県立徳島工業高等学校と改称
昭和33年	1958	4月1日	金属工業課程（第二機械科）を新設する
昭和38年	1963	1月13日	本館改築工事起工式を挙行
		4月1日	定時制夜間課程に工業化学科を新設。全日制紡績科を繊維工学科に、木材工芸科を工業デザイン科に改称
昭和41年	1966	11月1日	新本館完成（延べ9,425㎡）
昭和48年	1973	4月1日	第二機械科を金属工業科と改称
昭和53年	1978	3月31日	定時制夜間課程の募集を停止する
昭和57年	1982	3月31日	金属工業科の募集を停止する
昭和62年	1987	4月1日	電子機械科を設置
平成7年	1995	4月1日	工業7科の募集を停止し、工業Ⅰ類、Ⅱ類に再編する
平成16年	2005	10月23日	創立100周年記念式典等を挙行
平成19年	2007	4月1日	高等学校再編により徳島県立徳島科学技術高等学校が設立
平成21年	2009	3月31日	徳島県立徳島工業高等学校が廃校となり、徳島県立徳島科学技術高校に統合される



創立10周年記念式典（大正4）



染織科授業（昭和13）



製図実習（昭和10）



校外写生（昭和10）



木工工芸実習（昭和12）

あいさつ

県の公文書は、職員が県民の生活に則して職務を遂行するために入手し、また作成した文書です。したがってその時代を生きた県民の生活に即した貴重な歴史資料です。今回は、今春高校再編方針によって「徳島県立徳島科学技術高等学校」として統合・再出発した三校のうち、徳島県立徳島工業高等学校の公文書と学校資料・写真を中心に戦前の徳島の中等学校における工業教育について概観する展示といたします。

徳島工業高等学校の前身は、明治三五（一九〇二）年、文部省告示第一八七号により設置が許可され、明治三七（一九〇四）年「徳島県立工業学校」として開校しました。設立の背景や設立に至る経緯、設置された染織科・建築科の教育活動のようすを公文書や学校資料・写真などでご紹介いたします。また、学校あげての大きな行事でありました、二度の皇太子行啓の様子についてもご紹介いたします。さらに日露戦争のさなかに設立され、その後、第一次・第二次世界大戦へと向かっていきますが、戦争が学校教育にどのような影響を及ぼしたのかも考えたいと思います。

昨年、徳島工業高等学校から当館に移管されました公文書や学校資料・写真はあわせると一〇〇〇点を超えます。展示に使用した資料はごく一部にとどまっていますが、戦前の工業教育の様子が手に取るようにわかります。これらを展示紹介することによりまして改めて公文書や学校資料の保存・整理の大切さを考える機会といたします。

この展示の開催にあたり、旧徳島県立徳島工業高等学校、徳島県立徳島科学技術高等学校をはじめ数多くの方々のご協力をいただきました。末尾ながらお礼申し上げます。

平成二十一年十月二十七日

徳島県立文書館長 計 盛 眞一朗

の設立と徳島市大字前川村への設置が認可された。

徳島県立工業学校設立の過程を見るには、公文書の中に残されている「日誌」がもっとも詳しい。これは、他の教職員に先駆けて明治三七（一九〇四）年二月二〇日徳島県立工業学校書記に任ぜられた高木古須衛書記が起筆した学校日誌であろう。この日誌を中心に、この学校の設立経過を具体的に見ていこう。



①明治三十九年三月二十四日撮影第一回別科木工部夜学修業生写真
前列左から四人目が吉田佐次郎初代校長

②明治三十七年本県公布全書（徳島県報）
令二二号徳島県立工業学校規則



③明治三十七年四月二十八日「工業学校生徒心得」の制定



④明治三十七年五月一日「生徒制服」の制定



入学志願者の体格試験を行う。

四月一六日

入学者を決定する。各自に郵便ハガキにて通知する。

四月一九日

教授用品取調べとして老田・小川・芝田3教諭黒崎書店へ行く。

四月二四日

吉田校長、教育上に関し知事の訓示を受けるため県庁に登庁を命ぜられ、今朝出張する。

四月二七日

本校教諭に熊本県立工業学校から転任した中島誠、本日到着・登校。

四月二八日

本校教諭に転任された永井源治昨夜到着し、今朝登校。

（生徒心得を制定する。）③

五月一日

日曜であるが明日始業式のため職員総出で準備をする。

五月二日

午前七時三〇分頃より生徒及び父兄登校。生徒の出席四六名。父兄の出席は三〇名。

八時三〇分より床次知事と三課属梶浦卿之助来校。午後九時鐘を鳴らし始業式開始。まず、生徒一同着席、次に父兄、次に職員一同着席。吉田校長の先導で知事入場。梶浦三課属のかけ声で全員起立礼を行う。吉田校長告辞。床次知事式辞。一同礼の後知事退席。知事に休憩室にて茶菓を饗す。一〇時学校を出る。生徒・父兄には高井・中島両教諭が学校に関する談話を行い正午一二時に解散する。職員一同は午後六時より祝盃兼懇談会を開き午後九時散会。会場は福本楼。

五月四日

本日より授業開始。もっとも実修は準備中なので授業時間は一二時とし、生徒を開放する。

五月一日

（生徒の制服・帽章等決まる。）④（後略）

この日記は、明治三十七年二月二五日に赴任が決まった吉田校長が、三月四日に赴任して五月二日に始業式を迎えるまで、わずか二ヶ月間で職員を集め、入試を行い、学生を集め、教科書から机・椅子などの備品を買いそろえ、授業開始に至るまでの経過がよくわかる。本文の内容を意識してい

明治三十七年の日誌から見た徳島県立工業学校の設立

国は明治三〇年代積極的に教育改革を行い、三三（一八九九）年には改正中学校令・高等女学校令とともに実業学校令が公布された。『徳島県議会史』によれば、これを受けた明治三二年六月の臨時議会において、県立女学校との設立とともに実業学校の設立が話題となった。次の一〇月の通常議会には、実業学校を一校設置することについて、県は工業学校建設及び校長年俸を予算案として提出した。しかし、県会の中には農学校の建設優先を求める声もあり廃案となった。その後、三四年の一〇月の通常議会にて、農学校と工業学校を併置する案が出され、一二月の臨時県会でもよく決着した。工業学校の建築には、三五年から三年間総額六一、七二四円の予算が認められた。三五年一二月には、文部省告示で「徳島県立工業学校」

「明治三十七年徳島県立工業学校日誌」より

二月二〇日

高木古須衛、書記に任命される。県庁内務部三課内で勤務する。

二月二五日

石川県立工業学校の教諭であった吉田佐次郎が本校校長に任命される①。本日電報で、二月一八日付にて本校規則の制定が、文部大臣より認可されたことが伝えられる。

二月二八日

本県（徳島県）県令第三二号にて、本校（徳島県立工業学校）規則を達す②。

三月四日

吉田校長、今晚五時着県。午前県庁に出頭。午後より各県立学校及び各官衙へ新任の挨拶のため巡回する。

三月六日

吉田校長、本日徳島町四一番屋敷に転居。

三月七日

吉田校長午前は県庁、午後より藍褒賞授与式に臨席する。

三月八日

本日から午前県庁より本校に移り事務を行う（学校での事務開始）。

昨日、県庁第五課より、布団六枚、枕、革張り椅子六脚を受け取る。

三月九日

那賀郡坂野尋常高等小学校・県立富岡中学校より本校入学生徒試験について問い合わせが郵送される。

三月一四日

森豊吉より戸棚・椅子一四脚などが納品される。その後も生徒机腰掛け九八脚、消火器などが納品される。

四月一日

午後三時床次知事、高井利太郎技師を従え来校。校内を巡見する。

四月六日

老田他鹿鉄、難波新平本校教諭に任せられ、本日起任登校する。

矢田徳太郎徳島師範学校教諭、本校教諭兼務を拝命。

四月七日

県技師高井利太郎本校教諭を拝命し（四月四日付）、登校し新任披露する。

四月八日

校長、高井・老田・難波の三教諭入学試験問題等を協議す。

師範附属が使用している教科書等、一年より四年までの読書・美術・理科・歴史・地理等を一括して借用する。

四月九日

校長、高井・老田・難波の三教諭入学試験問題の調製に従事する。

四月一日

入学試験の準備を行う。

四月二日

午前八時より入学試験を行う。職員全体は午前七時に登校する。

四月三日

午前八時より前日に引き続き入学試験を行う。本日芝野六助本校教諭に任せられる。

山内谷五郎を本校医として囑託する。

四月四日



徳島公園 猿檻



徳島工業学校 建築標本家屋



建築実習



徳島工業学校 実習工場の建築



板野郡立実科高等女学校 校舎（大正3）



徳島市助任郵便局 局舎（大正1）



徳島市 徳島倉庫株式会社 倉庫（大正1）



三好郡辻町 今宮神社神殿（大正3）

建築科が依頼された建造物や生徒の工作実習風景

建築科の教育活動

〈建築科設立の事情と時代背景〉

建築科（設立時は木工科）と染織科は、明治三十七年開設された時から設置されている徳島工業学校の中核となる学科である。いずれも本県の伝統的な産業に基づいた地場産業を近代的に発展させるため、地域社会の熱心な要望を背景として成立した。

明治三三（一九〇〇）年県議会において実業教育に力を注ぐべきであるという論が起り、県議会では県内に実業学校設立をめくり工業、農業、商業いずれを優先するかが議論された。（『徳島県議会史』）

当時の建築業界の状況としては、「県下には多数の建築業者があったが、いずれも在来工法にとどまり、新しい技術や理論の応用には遠く、一般にも建築に対する見識は低調であった。」という。こうした状況を打破するため、木工科（明治四四年建築科に改称）では、教授資料ともなるさまざまな建築の委託設計に応じ、生徒の実習を兼ねた工作・建築を県内各地で積極的に展開した。

〈建築科の意義と役割〉

「明治四三年度学事年報」（K200800067）には、「学校ト実業界トノ関係 木工科ニ於テ県内町村ノ公共建物等ニ就キ設計ヲ依頼シ又ハ其協議ノ為来校スルモノノ数益多ヲ加ヘ尚此等建造物ノ現場監督者ハ本校ニ於テ教授ヲ受ケタルモノ多キヲ以テ一層其連絡ノ密ナルを覚フ」とある。

この結果として県内全体に、徳島工業学校の設計および工作の建築物が見られるようになり建築業界のみならず、一般の県民の建築に対する意識を向上させることになったのである。

この他、建築材料の基本となるものや実験的なもの、およびその構造などを建築標本家屋とし、収集した建築用材料部分的に構成陳列して、生徒はもちろん広く一般に紹介することにも取り組んだ。（『徳工百年史』）

在来工法とは異なる新しい建築システムの導入、設計・管理・施行システムの導入、建築レベル、教育内容の高さなど徳島県の工業近代化の礎を築くのに貢献したといえる。

おもな徳島工業学校依頼建造物一覧表 — 建築写真資料より作成 —

建築期間	設計監督工作	建築物名称	種類	建坪	建築費
M45・7起工～ T1・9竣工	設計及監督	徳島市 助任郵便局局舎	木造2階建	20坪	1700円
T6・4起工～ T6・8竣工	設計及工作	板野郡桑島村小学校 増築工事		21坪	
T4・11起工～ T5・4竣工	設計建築科 軸部及小屋組工作同科生徒 監督同科卒業生	徳島県師範学校 渭水館	木造平屋建	39坪	1700円
T4・1起工～ T4・9竣工	建築科生徒実習ニテ成ル	徳島県立工業学校 実習工場	木造平屋建	40坪	600円
T2・11起工～ T3・5竣工	設計監督建築科 工作本科生及夜間別科生	徳島県板野郡立 実科高等女学校校舎	木造2階建	251坪	15097円
T1・2起工～ T1・11竣工	設計監督建築科 工作夜間別科生、 内部工作、付設職工学校	板野郡川内村立 尋常高等小学校	木造2階建	88坪	10250円
M43・7起工～ M44・5竣工	設計監督建築科 本校卒業生及別科生	撫養町育田 尋常小学校校舎	木造2階建	239坪	19969円
T4・5起工～ T5・11竣工	設計建築科、監督本校卒業生	徳島倉庫株式会社 倉庫	鉄鋼混凝土造	100坪	10000円
T1・9起工～ T2・5竣工	設計建築科 軸部小屋組3年生実習 監督卒業生、夜間別科生	徳島市 堀医院本館	木造2階建	40坪	5520円
T2・12起工～ T3・6竣工	監督者本校職員、夜間別科生 漆喰塗彫刻科生、付属徒弟学 校生	那賀郡富岡町 橋本医院	木造2階建	55坪	
T4	設計監督建築科、実習工作	麻植郡西尾村 呉郷文庫	木造2階建	33坪	
M42	設計建築科 軸部小屋組工作本科生実習 其他夜間別科生	徳島市 弘田医院本館	木造2階建	20坪	2500円
T6	設計工作建築科	徳島市後藤田千一氏 宅応接間	木造2階建	13坪	



建築模型（大正4）



建築製図（大正4）



建築実習（大正6）

戦争と徳島工業学校

戦争への予兆〈明治―大正―昭和初期〉

学校創立時の明治期から大正期にかけては、日露戦争時の旅順開城記念日、奉天会戦記念（陸軍記念日）、日本海海戦記念（海軍記念日）といった軍事的記念日の現役軍人による軍事講話や、陸軍観兵式への参加に関する文書などが残されているが、比較的に軍事的気配は希薄である。

大正一四（一九二五）年度には、学校に陸軍の現役将校が配属され、軍事教練が行われるようになり、かつ科目としての合否認定も配属将校にゆだねられている。

昭和六（一九三一）年の満州事変に引き続いて、昭和一二（一九三七）年七月の蘆溝橋事件を契機に日中戦争が勃発すると、急速に戦時的気配が濃厚になる。

「陸軍記念日市中行進行事ノ件」（昭和一三年三月一日徳島県学務課発各学校長宛）では西ノ丸運動場で行われた陸軍記念日への各



軍事教練風景

学校生徒の参加要請として、「中等学校三年以上武装ノ事」と付記されるなど、武装行進、宮城遙拝、神社参拝といった行事が多くなっていく。

戦中期〈太平洋戦争末期〉

この頃になると、若者の運命にも戦争の影が覆い始める。

昭和一七（一九四二）年までの卒業生累計二、二二五名のうち、進学者は八〇名に過ぎず多くが民間企業への技術者として巣立っていったが、昭和一八年には、卒業生一〇六名中、進学志望者が三三名と著しく増加し、とりわけ、陸海軍諸学校合格者が二一名と急増している。

なかでも海軍甲種予科練習生（「予科練」）の募集に關して、「甲種飛行予科練習生募集ニ関スル件」（昭和一八年六月八日付兵第三九一号徳島県内政部長発工業学校長宛）では、「今回海軍側ヨリ相当多数ノ志願人員ノ割当相成…本県トシテモ是非右人員ノ選出致度ニ付…」、「貴校ニ於ケル志願者選出目標員数ヲ概ネ一四名ト致度ニ付之ヲ獲得予想人員承リタシ」とあり、海軍や県が「予科練」募集人員数の目標を指示し、かつ「打合会」での報告を求めていることがわかる。

工業学校では、昭和一八年度、目標一四に対し一八名、昭和一九年度、目標二三に対し三八名と、目標を

超える数の生徒たちが応募している。

また、士気を鼓舞するためか、「予科練」の志願書が生徒の出身市町村長宛に送付され、学年を示すと思われる2や3の数字が記入されており、低学年志願者も少なくない。

勤労動員強化のため、教科授業時数が最高学年で年間九〇日（一五週）にまで削減され、飛行場奉仕作業、食糧増産などの勤労奉仕が、昭和一八年度では春から秋までの間で延べ五日に及んでいる。以後、終戦の昭和二〇年にかけて動員場所は県内外の工場に拡大されていく。教室を出て多くの時間を校外での作業に費やす戦時下の厳しい学校生活が伺える。



「甲種飛行予科練習生志願書送付ノ件」



染織科の諸相

染織科は明治三七（一九〇四）年の工業学校創設時より設置されている学科である。ここでは、前川校舎期（昭和一四）を中心にその諸相を見ていくことにしよう。

◆染織科設置の事情と時代背景

明治三五（一九〇二）年の徳島県議会では、実業学校問題が議論されていたが、正則科と速成科に区分し、速成科は在来の紺屋職人中から選抜して入学させ、二、三ヶ月で卒業をさせるという構想があった。徳島県は藍の本場で、安価な藍を使いながら、染織業が未発達なために紺織物が産業として成立していないという現状の改善のためであった。（『徳島県議会史』）

また、明治三九年に実習の方針等について、工業学校が文部省に提出を求められた文書の下書きによると、従来の家内生産から工場組織に、手工業から機械工業に移る傾向や、資本家の多くが資本を投じて機械による製造を推進し、染織物の輸出に力を入れようとする機運があることなどが踏まえられており、染織科はそうした時代の潮流に対応した人材を育成する役割を期待されていたことが分かる。

◆工業学校への実験依頼

工業学校では、教育活動のみならず、専門的な人材や設備を活かして、様々な要請にも応えていた。その要請の一つが、実験依頼である。（資料一）の明治三九年一月四日付けの「証明書」（控）はドイツのレオポルトカセラ染料会社製造硫化色素の耐度試験の結果である。これは、京都市のカセラ染料試験所代人梅澤源一の依頼を受けて、工業学校が実験をし、作成したものである。



証明書（資料一）

◆工場での研修

染織科においては、工場生活の内容の習得や実際の機械器具の取り扱い方と大量生産の操業に熟練することを目的として、夏季休業中には上級生徒を現業練習生として適当な工場に依託し、実践訓練を積ませていた。また、修学旅行においても、単なる物見遊山ではなく、工場等への視察が念頭におかれていた。昭和四（一九二九）年度の染織科第五学年の修学旅行実施の状況によると、東京での見学場所としては、千住製絨所、伊藤染工場等の施設が真っ先にあげられている。

◆幅広い人材育成

工業学校では、徳島県の染織業の発展のため、また、一般の社会教育の要請に応えるために、本科の学生以外にも幅広い教育活動が行われていた。ここでは大正一一（一九二二）年の文書を中心に、その一端を紹介しておくことにしたい。

①出張機織別科

徳島県の織物業の従業者は主として婦女子であったが、当時婦女子には専門的な技術を習得する機会がなかった。そこで、県下織物業の向上発展のためにも、業務に従事する婦女子に機業上の知識技能を授け、また、漁村の副業としての機業を奨励することを目的として、明治三八（一九〇五）年より、県下の各郡にわたり臨時教場を開設して、毎回三ヶ月以上毎日八時間の出張教授を行っていた。大正一年の段階で、すでに三八回行われている。明治三八年に名東郡加茂名村に臨時教場を開設した際には、徳島県の実業家であった美馬儀一郎が、生徒賞与金の寄付を願っている。工業学校のエデュケーションに対する、期待の高さが窺えよう。

②婦人染色講習会

工業学校では、世間の需要に応えるため、夏季休暇を利用して、県下各小学校の女教員及び高等女学校卒業程度以上の者を対象として、婦人染色講習会を開催していた。講習期間は一週間で、毎日午前八時から午後五時まで行われた。大正一一年の講習会では、定員を約四〇名としていたが、応募者が倍加し、超過人員を拒絶せざるをえないほど盛況であった。



染織科実習（昭和5）



染織科実験（昭和10）

工業学校と傷痍軍人・学徒動員

●傷痍軍人工業再教育所 昭和一二（一九三七）年七

月、泥沼の日中全面戦争に突入すると、徳島県立工業学校も戦時体制のなかに確実に取り込まれていった。八月に中国戦線に参加した歩兵四三連隊（徳島市蔵本町）から年末までに負傷者四八九人が送還、徳島陸軍病院（現在の県立中央病院）に収容された（『徳島市史』第五巻）。翌年二月二七日に徳島県は、就職を希望する傷痍軍人を再教育するために、工業学校に「傷痍軍人工業再教育所」を併設した。農業学校・商業学校にも再教育所を併設した。

昭和一二（一九四〇）年四月七日、陸軍大将の朝香宮鳩彦が再教育所視察のため工業学校に立ち寄る。校長大久保惣太郎の説明資料によると、①修学期間は三ヶ月で、染織科は染色・分析・メリヤス、建築科・機械科は製図、木材工芸科は木工・塗装の科目を設置、②昭和一四年度の入所者は三〇人、修了者九人、現在も入所中三人、③修了者が少ないのは、傷の治癒状況・原隊復帰・召集解除などによる移動のため中途退所が多いからである（『再教育書類』K200800282）。

昭和一四年度「宿直日誌」（K200800268）には、傷痍軍人に関する記事が散見される。八月二八日の宿直



朝香宮への説明資料

は、午前八時巡視時「普通科教室傷痍軍人二名製図作業中」「講堂二テ傷痍軍人一名メリヤス編作業中」「午後二時四〇分傷痍軍人退出ス」と記している。た

だ、工業学校の生徒と傷痍軍人との間にどのような交流があったのかは不明である。

その後、再教育所は昭和一六年八月起の「傷痍軍人再教育台帳」によると、一六年入所五人（修了四人・退所一人）、一七年入所二人（修了・退所とも不明）、一八年入所三人（修了一人・退所は不明）となっている。修了者五人のなかで就職先が判明するのは、呉海軍工廠（広島県）・福島紡績徳島工場（徳島市前川町）・呉海軍施設部小松島出張所の三人である。昭和一九・二〇年の再教育所に関する記録は残っていないが、日中戦争以降、工業学校は傷痍軍人の自立に大きな役割を果たした。

●学徒勤労動員 昭和一八（一九四三）年度「本庁往復書類綴」（K200800169）・同「本庁外往復書類綴」（K200800191）には、校長を隊長として生徒・教職員で組織した「徳島県立工業学校学徒振興隊」が行った勤労奉仕作業を、県学徒振興団長（県知事）・県内政部長に報告した書類がある。それによると工業学校は、食糧増産奉仕（米麦収穫・脱穀・高畦作り・芋掘り・施肥など）を名東郡北井上村・新居村・国府町や板野郡川内村で、飛行場勤労奉仕を松茂村で、土地改良勤労奉仕を那賀郡坂野町で、草刈り奉仕（場所不明）を、年末までに延べ三三日間勤労奉仕作業に出かけている。さらに、夏休み中に三・五年生（第二本科建築科二年生も含む）が、軍需産業（二二〇人）・生産拡充産業（六三人）・国防土木建築業（七二人）でそれぞれ六日間作業している。

昭和一九（一九四四）年三月に政府は、中等学校生徒以上の学徒勤労動員を通年実施することを決定した。六月一九日、工業学校は第一回通年勤労動員生徒壮行

式を実施する（『徳島百年史』年表による）。同年一月七日付の檉原捻鋸製作所（徳島市南出来島町）作成資料によると、①六月一九日に工業学校機械科五年生三人を受け入れるが、「県御当局ノ御都合ニ依リ」七月一日に五年生は日本製鉄広畑製鉄所（兵庫県）へ転出する、②七月一六日に機械科四年生四〇人を受け入れ、現在に至る、③作業内容は、航空機用自動砲弾体・航空機用捻鋸・水雷砲弾部分品の製作であった。

昭和一九年二月作成の「生徒帰省予定表」がある。年末年始に日本製鉄広畑製鉄所から徳島へ帰省する工業学校五年生七四人（機械科二八人・建築科二三人・染織科二三人）が二班に分かれ、二月二五日から二〇年二月五日まで四日間ずつ帰省する計画である。彼らには会社から年度末賞与として一人当たり五〇〜一〇五円が支給された。製鉄所での作業内容は不明であるが、コークス運搬もあったようだ。また、年末年始に機械科の四人に宛てて、予備整備兵として海軍の館山航空隊・相模航空隊へ一月二五日入隊の通知書が届き、急ぎ帰省するという出来事もあった（『学徒動員関係書類』K200800283）。

昭和二〇・二一年度「本庁外往復書類綴」（K200800192）に、校長が四国軍管区兵務部長に宛てた二〇年八月一〇日付の報告書がある。柏原捻鋸製作所・徳島造船（徳島市万代町）・日之出航空（徳島市矢三町）など五工場で機械・建築・木材工芸・工業化学の各科学徒三・四年生（第二建築は二年生）二五六人の勤労動員が記されている。終戦まで、あとわずかである。

手記などでは語られてきた学徒動員であるが、工業学校が残した文書群は、その実像をよりいっそう明確にしたのではないだろうか。

晴れの一大イベント 皇太子行啓

「此日や、九重の雲、弥深き裡に、神ならせ給ひし、日嗣の皇子、畏くも、この僻遠の地に、態々御駕を躍めさせられしに」(明治四一年五月二日付内務部長宛「行啓二関スル記事」より抜粋)

明治四一(一九〇八)年四月一五日、徳島行啓中の皇太子(後の大正天皇)が徳島工業学校を訪れた。午後二時二〇分同校に到着した皇太子は、随員の県知事から学校一覽表・教授要旨・学校写真帖・記念絵葉書などの捧呈を受け、自らの御真影を同校に下賜。その後、校長の先導で生徒実習や木工・染色参考品室などの学校施設を見学した。「生徒及び当業者の参考に資する為」の参考品室に、陸軍省下付の日露戦争戦利品

があわせて陳列されているのが当時の世相をよく示している。皇太子は上機嫌でいくつかの質問をし、午後三時一〇分同校を後にした。学校製作品が「御買上」となり、こうして皇太子行啓は無事終了する。開校後四年しか経ていない同校にとって、皇太子の行啓は大変な名誉であった。先にあげた「行啓二関スル記事」からは学校関係者の興奮が見て取れる。

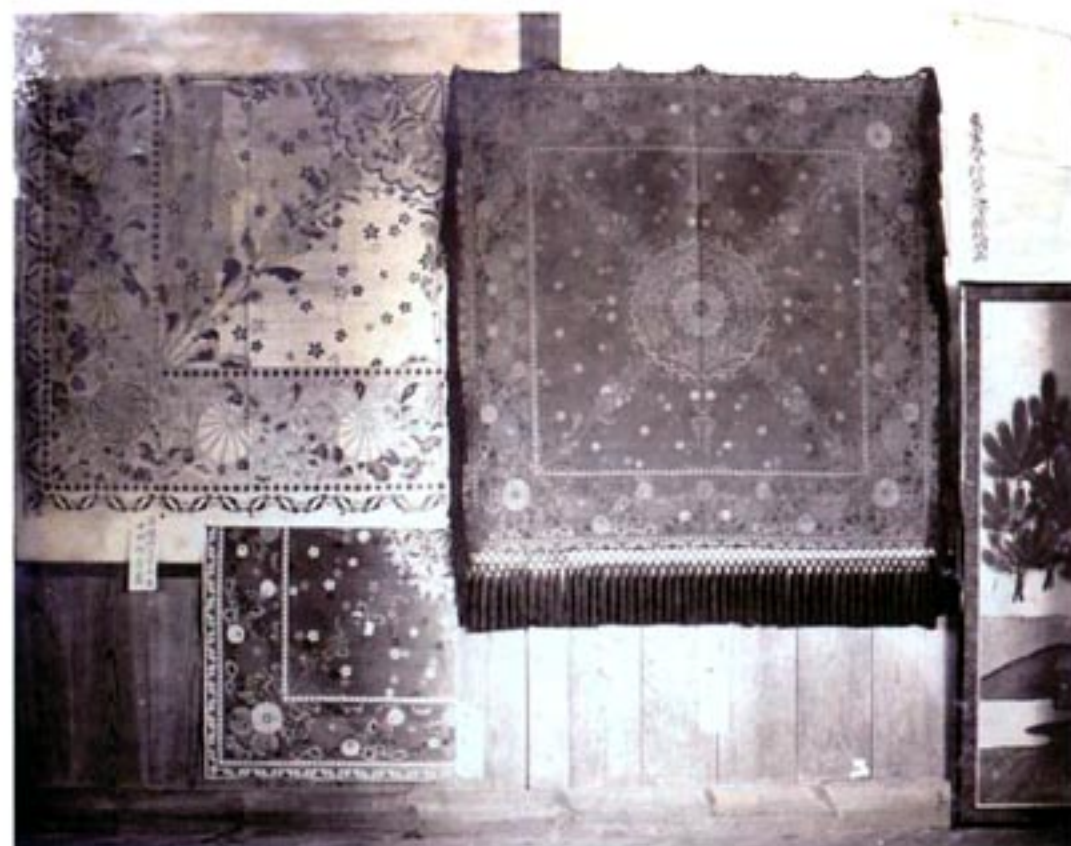
大正一一(一九二二)年一月二八日、徳島工業学校は再び皇太子(後の昭和天皇)の行啓を迎える。徳島工業学校の「校友会誌 行啓記念号」や「東宮殿下行啓通牒及奉啓書類」などの当時の公文書によると、行啓の一〇日以上前から美化作業以外の入室が禁止さ

れ、前々日には職員生徒の健康診断が実施されるなど、工業学校が万端の準備を整えて皇太子を迎えた様子がうかがわれる。皇太子は生徒成績品や生徒実習を見学し、このときは皇太子による「御手植え」も行われている。その夜には徳島市内で提灯行列が行われており、工業学校の生徒もそれに参加している。

「東宮行啓之際県献納物」(明治四一年)
徳島県からの献納物の中には工業学校生徒デザインによる織物も含まれていた。



「行啓二関スル記事」(明治41年)
徳島県内務部長にあてた報告書の案文。皇太子を迎えて高揚した当時の工業学校の雰囲気伝わってくる。
(「明治41年 県庁往復書綴」(K200800073)より)



展示資料一覧

No	表 題	年 代	備 考
徳島県立工業学校の設立			
1	徳島県立工業学校規則（創立）	明治37年（1904）	K200800034
2	明治37年起決議綴	明治37年（1904）	K200800038
3	明治37年起本校規定類	明治37年（1904）	K200800041
4	明治37年日誌	明治37年（1904）	K200800042
5	創立当時の服装規定図	明治	K200800256
6	本県公布全書	明治37年（1904）	K200600362
7	「徳工」校旗		K200800257
建築科の教育活動			
8	明治38年諸報告綴	明治38年（1905）	K200800043
9	明治39年諸報告綴	明治39年（1906）	K200800050
10	明治40年報告綴	明治40年（1907）	K200800069
11	明治44年報告	明治44年（1911）	K200800087
染織科の諸相			
12	明治39年往復書綴	明治39年（1906）	K200800049
13	明治39年決議綴	明治39年（1906）	K200800068
14	昭和5年県庁往復	昭和5年（1930）	K200800146
15	大正11年県庁往復	大正11年（1922）	K200800132
戦争と学校			
16	大正14年県庁往復	大正14年（1925）	K200800143
17	昭和12年本庁往復書類	昭和12年（1937）	K200800186
18	昭和18年度本庁外往復書類綴	昭和18年（1943）	K200800191
晴れの一大イベント 皇太子行啓			
19	明治41年県庁往復書綴	明治41年（1908）	K200800073
20	大正5年秘書雑書	大正5年（1916）	K200800108
21	校友会誌 行啓記念号	大正11年（1922）	K200800063
22	東宮殿下行啓通牒奉啓書類	大正11年（1922）	K200800134
工業学校と傷痍軍人・学徒動員			
23	昭和15年度宿直日誌	昭和15年（1940）	K200800164
24	再教育書類	昭和13年（1938）	K200800282
25	学徒動員関係書類	昭和19年（1944）	K200800283
26	昭和20・21年度本庁外往復書類綴	昭和20年（1945）	K200800192

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。
※写真も多数展示しております。



第38回 企画展

「写真と文書で見る 徳島工業高等学校史」

平成21年10月27日

編集・発行

徳島県立文書館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山
電話 088-668-3700

印刷

株式会社 教育出版センター

〒771-0138 徳島市川内町平石流通団地27
電話 088-665-6060

— 展示解説 —

平成21年12月6日(日)

平成22年1月10日(日)

午後1時30分～3時

徳島県立文書館2階 講座室